IS＜インフィニット・ストラトス＞～白い閃光～

カイクウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞～白い閃光～

【Ｎコード】
Ｎ５０８７Ｗ

【作者名】
カイクウ

【あらすじ】
Ｕｎｋｎｏｗｎ・・・それが彼のコードネーム。白い閃光と呼ばれるＡＣを駆り、戦場に今、君臨する。あ、間違えた。白い閃光と呼ばれるＩＳを駆り、戦場に今、君臨する。
駄文です。急展開です。それでもいいならどうぞ

嵐の前の静けさ

◆

俺のいる世界は・・・混沌としていた
全てが狂っている。全てが分からない
地球は荒れ、空へは行けず、紛争が起こり、そしてまた人々は争いあう
俺は・・・後何回争えばいい
俺は・・・後何人殺せばいい
俺は・・・俺は・・・

「政治屋ども・・・リベルタリア気取りも今日までだな。貴様らには水底が似合いだ」

一人の男。オッツタルヴァが呟く

彼はかなりの毒舌家で、人を傷つけること簡単に言ってしまう

管理機構カラード所属リンクスのトップランカーである

「行けるな？フラジール」

彼が呼びかけるのは相棒のＣＵＢＥ
武装を速射性の高い実弾兵器で統一した空力性能にのみ特化した軽量二脚ネクスト「フラジール」を駆る、アスピナ機関所属のテストパイロットである

「はい。そのつもりです。」

「フン・・・それはよかった。じゃ、行こうか」

そして俺のコードネームはＵｎｋｎｏｗｎ
「ホワイトグリント」・・・「白い閃光」の名を持つ、機体を駆る者だ

「そうだ。頼りにしてるぜ。『リンクス戦争の英雄』」

「その呼び方・・・辞めてくれないか？　俺も好きで呼ばれてるわけじゃねーんだ」

「二人とも、静かにしてくれませんか？今から戦争に行くんですよ？」

「ああ、分かってら・・・なぁ、オッツタルヴァ。フラジール。」

「何だ？」

「まさか・・・弾数が少ないとでも言うのですか？」

「そういうんじゃねぇ・・・頼むから・・・」

「死ぬんじゃねーぞ」

「フッ・・・了解！！」

「まったく君と言う人は・・・誰だって・・・死ぬのはいやですよ」

「だから死んでほしくないんだ。目の前でお前らがくたばるなんてごめんだからな」

そうだ。目の前で仲間が死んでいくなんていやだ
だから・・・俺は決めたんだ
誰も・・・殺さないと・・・

最後の任務

◆

今回の任務はラインアーク襲撃
腐りきった企業からの命令で俺とオッツタルヴァとフラジールが
任命された
あいつらの命令なんか聞きたくもないけど・・・やるしかない・・・
やらなきゃやられる。けど生きるためには殺さなければならない
それが・・・・・この世界のルールだ

「くっ・・・メインブースターが逝っちまってる！　これが私の最後だと！？」

ちっ・・・オッツタルヴァが！！

「おい！！大丈夫か！？オッツタルバァ！！」

オッツタルヴァのＡＣ「ステイシス」のメインブースターが相手ＡＣに撃たれてしまった
このままではオッツタルヴァは沈没してしまう

「へっ・・・俺は先に行くぜ・・・まぁ、フラジールと・・・生き延びろ・・・」

「だめだ！！お前もいきんだよ・・・生き延びるんだよ！！」

「死ぬのは――――――俺だけで―――――――十――――――分――だ―」

「だめだっつってんだろ！！俺がお前らを助けるから！！死ぬなぁぁぁぁ！！」

「じゃ――――――――俺の――――――――まで――――――――フラジールを――――――」

その言葉を最後に・・・
オッツタルヴァとの通信が途切れた・・・

「う・・・そ・・・・・・だ・・・・・」

何度通信しても・・・オッツタルヴァには繋がらない
うそだ・・・うそだ・・・

「うそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだ・・・うそだぁぁぁぁぁぁ！！」

（まずい！！Ｕｎｋｎｏｗｎがパニック状態に陥ってしまっている！）

フラジールは相手の弾幕を次々と避け、相手に確実にダメージを負わせていく
しかし、敵に背後を取られ、ブレードでダメージを追わせられる

「くっ・・・・」

「フラ・・・ジール・・・・？」

さらに相手は超電磁砲（レールガン）を構えチャージしはじめる

「くっ・・・・まずいですね・・・・」

するとフラジールはＵｎｋｎｏｗｎを蹴り飛ばす
そして相手ＡＣの超電磁砲（レールガン）が放たれる

「せめて・・・・あなただけでも・・・・」

「へ・・・・？どういうことだよ・・・・？フラジール？」

「私には好きな人がいた・・・・その人は戦争で死んでしまった・・・・」

「おい！！フラジール・・・お前、まさか・・・・！」

「これで逝ける・・・あなたのもとへ・・・・」

「フラジール！！おい！！・・・・」

そして野太い熱線がフラジールを包む
それと同時に・・・フラジールとの通信が切れる

「フラジールゥゥゥ！！」

Ｕｎｋｎｏｗｎは一人・・・
コックピットで泣いていた

「ちくしょぉぉぉ！！俺が・・・俺がもっと強ければ・・・二人とも守れたに・・・死ななかったのに！！ちくしょー！！ちくしょー！！ちくしょぉぉぉぉぉぉ！！」

コックピットの画面をバンバンとたたくＵｎｋｎｏｗｎ
その顔は悔し涙でぐちゃぐちゃになっている
そして、敵の超電磁砲（レールガン）の野太い熱線に彼もまた

「ちくしょおおおおおおおおおおおお！！」

・・・Ｕｎｋｎｏｗｎ・・・それは彼のコードネーム。本名は不知(しらぬ)火正宗(いまさむね)

彼の機体「ホワイトグリント」は・・・熱線に飲み込まれていた

転生先は・・・・・（前書き）

前回・・・少しミスりました

ｕｎｋｎｏｗｎの台詞・・・「オッツタルバァァァァァァ！！」の部分を

「オッタルバァぁぁぁぁぁ！！」と書いてしまいました・・・

第三話です

◆

転生先は・・・・・

「・・・・・・」

ここ・・・どこだよ・・・

深く・・・・・・暗い闇・・・・・・俺はそこにいた・・・・・・

＜兄・・・・・・兄・・・・・・＞

誰・・・・・・だ・・・・・・？俺を・・・・・・呼んでんのか・・・・・・？

＜兄はなぜここにいる・・・・・・？＞

それは・・・・・ＡＣに撃たれて・・・・・

＜兄は死んだのではない。始まったのだ＞

何がだよ・・・・・ってか、アンタ誰？

＜私にもわからない・・・・・ただひとつ分かっているのは兄と同じ、誰にも知られていない者ということ・・・・・＞

・・・・・は？

どういうことだよ・・・・・

＜兄のもうひとつの名は・・・・・ｕｎｋｎｏｗｎ・・・・・知られてないものという意味・・・・・＞

？？？

＜さて、私の名前はいいとして・・・・・先ほどもいったように兄は死んだのではない。むしろ始まったのだ・・・・・＞

何でだよ？俺はＡＣの超電磁砲に撃たれて死んだんだぞ！？

＜そのときに開いたんだ・・・・・時空の扉が・・・・・そして兄達はそれに吸い込まれたしまった・・・・・＞

ちょっと待て・・・・・
今、俺達っていってたよな？
もしかして・・・・・オッツダルヴァたちも生きてるのか！？

＜あぁ・・・・・生きている。兄が今から行く世界にな＞

ちょっと待て。
今俺が行く世界って言ったよな？

＜さて・・・・・そろそろ、出発だ＞

え？無視？
てか出発って何？

＜向こうの世界で気をつけよ＞

あれ？なんか地面がすーすーするな～～～
それもそのはず床がないんだから

＜行きなさい＞

って・・・・おい！！

「人思いにやれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

こうして俺は・・・・・また戦場に駆り出されるのだった

ＩＳ学園（前書き）

やばい・・・・小説書いてるとき・・・・むちゃくちゃ楽しい

第四話です

◆

IS学園

目が覚めたら・・・・・俺は・・・・・

「保健室・・・・・か？」

保健室で寝ておりました
いや、何で？

「それより・・・・あのおっさんによればここにオッツタルヴァ達がいるって話だけど・・・・どこにいるんだ？」

とりあえずここから出るか・・・・・
まずベッドから出ないと・・・・・
するとドアがガララと開いた。誰か来たのか？

「おや？気がついたようだな」

カーテンを開けたのは黒いレディスーツを着た女の人
なんというかこう・・・・・大人の女性！！っていう感じがする

「おっと、自己紹介がまだだったな。私の名前は織斑千冬。ＩＳ学園で教員をやっている」

そう言って織斑さんは俺に名刺を差し出した

「はぁ・・・・・どうも」

「さて。いろいろ聞かせてもらいたいが・・・・・なぜあそこで倒れていた？」

「倒れていた？俺がいつ？」

「覚えてないのか？君は学園のゲート前で倒れていたんだぞ？そこへ私が偶然通りかかって、君を助けた・・・・・というわけなんだが・・・・・」

やべぇ・・・・・ぜんぜん覚えてない・・・・・
あのくそ親父、俺をどこに転生しやがったんだ？

「まず、君の乗っていた兵器・・・・・あれは何だ？」

「え？ホワイトグリントの事か？」

「ほう・・・・・ホワイトグリント・・・・・と言うのか・・・・・
何なんだ？あれは」

まぁ、俺はその織斑さんに色々話した
助けた仮もあるもんだからついペラペラ話しちゃったけど・・・・
・大丈夫だよな

「つまり・・・・君は違う世界で戦闘中だった所に敵に撃たれ、そのまま気を失ってしまい、気がついたら保健室で寝ていたと・・・・・」

まぁ、簡単に言えばそうだけど・・・・・

「そうだ・・・・君と戦っていたという戦友は・・・・・」

すると織斑さんは手に持っていたファイルから二枚の写真を取り出す

何だ？

「この二人の男・・・・・か？」

そこに写っていたのは・・・・・オッツタルヴァとフラジールだった

「!?・・・・・なんでこの写真を!?」

「知りたいなら私について来い」

と言ってソファから立ち上がる

「どこにスか?」

「職員室まで。君に見せたい物もあるしな」

織斑千冬・・・・・

この人・・・・・何ものだよ・・・・・?

女性専用兵器。その名はＩＳ

◆

「なぁ、織斑さん」

俺の名前は不知火正宗(しらぬいまさむね)コードネームはＵｎｋｎｏｗｎ

カラードに所属する、リンクスなんだけど・・・・今は事情が

あってここ、ＩＳ学園にいる
そんでこの織斑千冬（おりむらちふゆ）って女の人に学園を案内してもらってるんだけど・・・・・

「何だ？私の答えられる事ならば何でも答えよう」

「じゃあ・・・・・ＩＳって何？」

俺の元いた世界にはＡＣ（アーマードコア）っていう人型兵器があったんだけど・・・・・
それに似た物かな・・・・・

「ＩＳは女性にしか反応しない世界最強の兵器・・・・・この世界は男女の社会的パワーバランスが一変し女尊男卑が当たり前になってしまった時代なんだ・・・・・ただ」

「ただ？」

「一人だけ・・・・・いや。君の戦友二人を含めると三人か・・・・・私の弟がＩＳを機動させてしまってな。そのせいで世界でただ一人のＩＳ学園、男子生徒になってしまったんだ」

「はは・・・・・・」

話が全然分からん・・・・・・

つまり・・・・・この世界でＩＳっていうのは世界で最強の兵器でそれは女の人しか使えない・・・・・しかし、織斑さんの弟が世界で初めて男がＩＳを機動させる・・・・・という快挙を成し遂げた・・・・・しかも、その女性専用兵器をオッツタルヴァとフラジールは起動させてしまった・・・・・ってことだよな？

「君も適性検査をして、ＩＳを起動させたらここＩＳ学園に強制入学されてしまうがな」

「えっ・・・・・？それって・・・・・オッツタルヴァとフラジール、ここに入学すんのか！？」

俺の声が廊下に響く。かなり大きい声だったみたいだ

しかし・・・・・あいつらここに入学するのかよ！？

「オッツタルヴァ君はここの男子教員として働いてもらう。そしてＣＵＢＥ君はここの二年生として学園生活を送ってもらう」

まじかよ・・・・・あのオッツタルヴァが先生・・・・・似合わねぇ～～～・・・・・

「あれ・・・・・？そういえば・・・・・・俺のホワイト・グリントは？」

そうだよ、俺の愛機、「ホワイト・グリント」
アイツはどこにあんだ！？

「ああ、そういえば・・・・・整備班が持ってったぞ」

「整備係ってどこですか？」

「ああ、あそこの部屋だ」

「そうスか・・・・・ありがとうございます」

そして俺は大きく息を吸い、心を落ち着かせた

「スーハー・・・・・テメーら皆殺しだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

そして、シャウトした

「コォォォォォォラァァァァァァァ！！俺のォォォォォォォォォホワイト・グリントはぁァァァァァァ！！どこじゃァァァァァァァァァァ！！」

勢いよくドアを開け、そこで俺が見たものは
改造されている（他の人が見たら全然分からないが）ホワイトグリントと整備科の皆さんの視線であった

「えーっと・・・・・君は誰？」

「不知火槙。ホワイト・グリント操縦者だ」

「ホワイト・グリントって・・・・・・この子？」

そういってめがねをかけた女子がホワイト・グリントを指差す

「そうだ！何でそれ改造してんだよ！？」

「とりあえず・・・・・落ち着いて話したら？」

「これが落ち着いてられっかぁぁぁぁぁ！！俺のグリントが改造されてんだぞぉぉぉぉぉ！！」

当然、俺の怒りは収まることはなく、さらに怒りがヒートアップするだけであった

すると奥の方からきいた聞いたことのある声が聞こえてくる

「誰だ・・・・・ジェット機みたいな声を出してる奴は・・・・・」

「まったく・・・・・静かに勉強できませんね・・・・・」

奥から出てきた二人の男

それは一度別れてしまった戦友の姿だった

「お前らは・・・・・・」

「ん？・・・・・お前は・・・・・・」

「あなたは・・・・・Ｕｎｋｎｏｗｎ！！」

「お前ら！！生きてたのか！！」

再びの再会に俺たちはただただはしゃぐだけだった

再会、そして出会い（前書き）

あ～・・・・・腹減った・・・・・・

第六話で～～～～～す

再会、そして出会い

◆

「しかし・・・・・何でお前ここにいるんだ？」

「分かんねーや・・・・・なんか気が付いたら保健室で寝てた」

しかし・・・・・ＩＳ学園ってすげーな・・・・・

まずでかいもん

「寝てたって・・・・・今まで戦闘中にか？」

「ちゃう！！相手に撃たれて死んだと思ったらなんか変なおっさんが出てきて・・・・・」

「「変なおっさん？」」

オッツタルヴァとフラジールが声をそろえながら、首をかしげる

なんだ？そんなに気になるのか？変なおっさんに

「どうした？」

「いや・・・・・なんか・・・・・・」

「私達と同じですね・・・・・・」

「同じ～～～？」

「ええ・・・・・私達も敵に撃たれた後、奇妙な男性に出会ったのです。そして気が付いたら・・・・・」

「ここにいたってわけだ」

「ふ～ん・・・・・で、お前らここで何やってんの？」

「整備科の皆さんの手伝いをしています。そうだ、あなたに整備科の皆さんをご紹介します。付いてきてください」

あ～・・・・・やっぱりコイツすげー丁寧な言葉使うな・・・・・

などと関心してる俺であった

「あ、ちょっと、フラジール。」

「ミスタルバです」

「へ・・・・・？」

「ＣＵＢＥはカラードネーム。フラジールは私のＡＣ（相棒）。私達はここは私達の知ってる世界ではありません。ですから、自分の本名で呼びあいましょう」

「あ、ああ」

コイツ・・・・・ミスタルバって言うんだ・・・・・

「じゃあ、改めて言うけど・・・・・俺の名前は不知火正宗（しらぬいまさむね）」

するとオッツタルヴァがボリボリと頭をかきながらこういった

「めんどくせぇな・・・・・前みたいにフラジールとかでいいじゃねーか」

「いい加減私も名前でよばれたいんです！！カラードネームだったらまだしも機体の名前で呼ばれるってどんだけ惨めなんですか！？」

おおっ・・・・・・フラジール・・・・・・もとい、ミスタルバが激怒した・・・・・・

「わ・・・・・分かった、フラジ――――――――――」

「ミスタルバです!!ミスタルバ・クリストファー!!」

「分かった、フラジ――――――――――ゴホン!!ミスタルバ」

「分かればいいんです」

先ほどの激怒はどこえやら、今のミスタルバは満面の笑みである

いや、まじ怖かったわ・・・・・

「はぁ・・・・・俺の本名はマクシミリアン・テルミドール。適当にテルミドールって呼んでくれ」

「それじゃ紹介してくれよ!!」

そうして俺はまた仲間が出来た
名前はミスタルバ・クリストファファー。マクシミリアン・テルミドール
カラードネームはオッツタルヴァとＣＵＢＥだ

整備科の皆さん～いらっしゃ～い（前書き）

更新遅れて、大変申し訳ございませんでした

心からのお詫び申し上げます

整備科の皆さん～いらっしゃ～い

～正宗サイド～

俺の名前は不知火正宗！！カラーズネームはｕｎｋｎｏｗｎ！！
よく皆から「お前、仮にも傭兵なんだからもっと警戒心強めろよ！！」といわれているピッチピチの１５歳だよ！！
そしてここはＩＳ学園！！ＩＳっていう女性専用戦闘兵器を使えることができる生徒が通う高校だよ！
そして俺は今、戦友のミスタルバに（カラーズネームはＣＵＢＥ）に整備科の皆さんを紹介してもらってるよ
そして俺は今、自分自身のテンションに凄くムカついてるよ！！

「皆さん。こちらの方は黛（まゆずみ）　薫子（かおるこ）。一年生にしてこの整備科のエースという大変優れた才能をお持ちの方なんですよ！！」

そういってミスタルバは俺たちにめがねをかけた女性を紹介する
どうやらこの人が黛（まゆずみ）　薫子（かおるこ）さんらしい

「どうも～♪君たちが空から降ってきた謎の少年だね？後でスクープ取らせてもらうから！よろしく」

黛さんはそういいながらドライバーをくるくると器用にまわしている
すげー・・・・・マジでエースなんだな・・・・・

「へぇ～・・・・・俺はマクシミリアン・テルミドール。よろしく」

テルミドールが黛さんに握手する
が、次の瞬間、黛さんの目が一瞬、輝いたのを俺は見逃さなかった

「お！？アナタは確か、男性でありながらｉｓを起動させてしまったというｉｓ学園初の男子教員！！マクシミリアン・テルミドール！？う～ん・・・・・今、整備しちなければアナタのこと取材したのに・・・・・残念！！」

「あ、ああ。悪いな。また今度受けてやるよ」

「言ったわね！？絶対取材受けてよ！！」

といって黛さんはガッツポーズをする。
しかし、この人、オーバーリアクションだな・・・・・一つ一つのリアクションが凄い
その後、黛さんは整備科の仕事があると言って俺たちと分かれた

「それでは、次に、行きましょうか」

そういってミスタルバが歩き出した
俺もそれに続こうと歩き出した瞬間、誰かに呼び止められた

「おい、不知火。」

呼び止めた人は織斑さん
俺になんかようなんだろうか？

「あ？なんスか？」

「お前にｉｓが乗れるかどうかを調べる。ついてこい」

「は？どういう意味すか？って、ちょ、ちょっと！！手を引っ張んないでくださいよ！！」

「いいから、早く来い！」

「そんな急がなくてもいいでしょうが～！」

こうして俺は強制的にミスタルバとテルミドールと分かれ、よくわかんねー所に連れてかれることになった

そして俺がそして俺がこの人に色んなことしゃべるんじゃなかったと後悔、絶望するまで三十分

超急展開でごめんなさい（前書き）

タイトル、話と関係なっ！！

第八話でございやす

超急展開でごめんなさい

～正宗サイド～

「んで・・・・・ここどこスか？」

僕の名前は不知火正宗！！ってこのテンションもういいわ！！

ゴホン！！・・・・・俺は今、ＩＳの適正診断を受けようとしてる

何でかって言えばこれがまた長くなるんだけど・・・・・

「ここはＩＳが使えるかどうかを調べるところだ。今からお前がＩＳを使えるかどうかを調べる」

「使えなかったら・・・・・？」

「・・・・ここを出て行ってもらう」

マジスか？・・・・・うわ～・・・・・・

そりゃキツイよ～・・・・・

「安心しろ。使えれば無事、ＩＳ学園に入学できる」

いや、入学してもあれだけど・・・・・

女子ばっかだけど・・・・・

「それじゃあはじめるぞ」

今、俺の今後の人生を決める適正診断が・・・・・始まる

十分後・・・・・

「・・・・・」

「ふぅ・・・・・」

「織斑さん・・・・・どうだった・・・・・？」

「残念ながら・・・・・お前は・・・・・」

まさか・・・・・・・・・・・・まさかぁぁぁ！？

はぁ・・・・・この先どうなんだよ・・・・・元の世界は戦いばっかとは言えまだ飯を食えてたもんな～・・・・・はぁ・・・・・

織斑さんは手を俺の肩に置き・・・・・ため息をはきながら・・・・・こういった

「合格だ。明日からお前は一年一組の生徒として授業を受けろ」

・・・・・・・・・・・は？

俺は十五秒間動きが取れなかった

そしてやっと動けたそのときの俺の第一声

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

これですよ

「何だ？嫌なのか？」

「いえいえいえいえいえ！そういうわけじゃ、そういうわけじゃないんです！！ただ・・・・・」

女子しかいなんじゃ・・・・・

そう言おうとした瞬間、織斑さんが口を開いた

「安心しろ。あそこのクラスは私が担任だ。それに、私の弟も一年一組だしな」

へぇ～・・・・・織斑さんの弟って一組なんだ～・・・・・
え？

「あの・・・・・・弟さんも・・・・・・乗れるんですか？」

「何にだ？」

「ＩＳに」

「ああ。言わなかったか？」

うん。俺の頭はテラカオス
かなりやばい状況ですよ
例えるなら、ＰＣでエロゲーをやっているときに親が帰ってきて
（俺はやっていないが作者は・・・）その時に消そうと思ったんだ
けどフリーズしちゃった・・・・・・みたいな状況・・・・・

「えっと・・・・・つまり・・・・・・えっと・・・・・」

ＩＳは女性しか使えない兵器なはずなのに織斑さんの弟さんは使
えるってこと・・・・・か

俺は大きく息を吸い、ラマーズ方を三回してまた大きく息を吸った・・・・・

「なんじゃそりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

こうして不知火正宗・・・・・カラーズネームＵＮＫＮＯＷＮＩＳ学園に入学しちゃいました♪

クラスメイト全員女という訳ではないが・・・・前編！！（前書き）

第九話・・・・・そして第一章です

クラスメイト全員女という訳ではないが・・・・前編！！

～正宗サイド～

「全員そろってますねー。それじゃSHR(ショートホームルーム)始めますよ〜」

俺は今人生で一番の緊張感に立たされている
例えるなら全校生徒の前で名曲ガッ〇ャマンを歌うくらい恥ずかしい物である
また例えるなら、全裸のおっさんが体に青いペンキ塗って「僕、ドラえもん！」って叫んでるくらい恥ずかしいものである

また例えるなら！！・・・・・・え？もういい？あっそう

とにもかくにも俺は入学式を終え、一年一組のＳＨＲ（ショートホームルーム）で自己紹介をしてるわけだが・・・・・どうも、副担任の山田真耶（やまだまや）先生が不に落ちない
なんというか・・・・・子供っぽいって感じが・・・・・

まぁ、そんな背伸び感たっぷりな副担任は俺たちに色々説明をしておりましたとさ
っていうか自己紹介ってなんでこんなにめんどくさいんだろうか
リンクス同士の自己紹介は全員無口だったからいいけど・・・・・
はぁ・・・・・よくしゃべる事が見つかるよな～

「それでは皆さん一年間よろしくお願いしますね」

沈黙

「・・・・・・・・・・」

全員がシーンとしたもうなんというか寒い
通りすがりのおばあちゃんが廊下を通ったら『何？先生死んだのか？』っていいそうだよね
そんなババアが通ることなんて一生ないだろうけど

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

うろたえている山田先生
ここで全員がまた返事しなかったらかなりのダメージですよ。心の
どうやら自己紹介はちゃんとするようで、生徒達は自分の名前と色々なことをしゃべっていた

そして、自己紹介はうわさの織斑先生の弟に回ってきた
名前は確か、織斑一夏

しかし、コイツも緊張しているのか動作がぎこちないような・・・・・

そりゃそうだ。俺と同じく真ん中&最前列なんだから、女子の視線は痛いほど浴びるはず
もう、なんというかやりのように刺さってくるはずだ

そして山田先生は織斑の名前を呼ぶ
が、しかし

「織斑君。織斑一夏君？」

反応なし。まったくの無言
おい！かわいそうだろうが！山田先生が！

「は、はいっ！？」

やっと返事をした、織斑
俺の殺気あふれる視線をこいつは感じたのか、コイツの声は裏返っていた
後ろからくすくすと笑い声が聞こえる。コラ、人の失敗を笑うもんじゃない。って俺もこんなこと言えた口じゃねーが

「あっ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

ぺこぺこと頭を下げる山田先生
あ～・・・・このまま頭を下げ続けたら土下座まで行くんじゃないだろうか？
頼む、織斑、自己紹介をしてくれ。こんな空気吸いたくない！！
図が火でもお願いしたい！

「いや、あの、そんなに謝らなくても・・・・・っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？約束ですよ。絶対ですよ！」

というわけで織斑一夏くんの自己紹介というものが始まった物で・・・・・

「えー・・・えっと織斑一夏です。よろしくお願いします」

なんともシンプルかつベストな自己紹介ですね～
シンプルすぎてすがすがしいです
まぁ、まだ、『好きな物はカレーです』とか『趣味はゲームです』とか普通の高校生の自己紹介をするんだろうな～・・・・・という俺の予想が外れるまで後５秒

「以上です」

がたたっとズッコケる人々たち（俺も含む）
何だよ、コレ

「オイィィィ！予想外の展開いいいいい！！」

「あれ、ダメ？」

そんな当事者は『どうしてこれじゃダメなんだ？』って顔をしてる

いや、だって・・・・

「もっとしゃべることがあるだろうが！！『好きな物はカレーです』とか『趣味はサボテンの飼育と株分けが趣味です』とか！！そう言う俺も何しゃべるか思いつかなかったがな！！」

「え、何で俺の考えてた事分かったの！？」

「当ってたんかいいいいい！！」

「てか、お前も思いつかないんじゃねーか！！」

「バカヤロー！俺だって他に名前以外にも言う事思いついたわ！！」

「あのー・・・・・」

涙声成分二割増している山田先生の声
先生もなんか言ってくださいよ！！と俺が言おうとした瞬間

パアン！！

叩かれました

「っつ～・・・・・誰だ！！俺の頭叩くのは！」

「げえっ、関羽（かんう）！？」

すると織斑はその関羽に叩かれた
すっごい、音だから周りの女子が若干引いてる

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

うわ・・・・・織斑さん超トーン低！！
はて、かすかにドラの音が聞こえるのは俺の幻聴だろうか？
マジックマッシュルームは食べてないが

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

あ、この前会った織斑さんの声だ
すごいね。人って簡単に声を変えられるんだもの
声優さんって凄い仕事してるな～・・・・・・

はい、すっごく突然ですがＣＭ入ります
後編に続く！！

クラスメイト全員女・・・・・という訳ではないが・・・後編！！（前書き）

更新遅くなってすいません！！

クラスメイト全員女・・・・・・という訳ではないが・・・後編！！

前回までのあらすじいいいいいい！

「げえっ、関羽（かんう）！？」

すると織斑はその関羽に叩かれた
すっごい、音だから周りの女子が若干引いてる

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

うわ・・・・・織斑さん超トーン低！！
はて、かすかにドラの音が聞こえるのは俺の幻聴だろうか？
マジックマッシュルームは食べてないが

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

あ、この前会った織斑さんの声だ
すごいね。人って簡単に声を変えられるんだもの
声優さんって凄い仕事してるな～・・・・・・

はい、すっごく突然ですがＣＭ入ります
後編に続く！！・・・・・ここまでが前回のあらすじだった・・・
・・

～不知火正宗サイド～

「い、いえっ、わたしは副担任ですから。これくらいはしないと・・・」

さっきの涙声はどこえやら山田先生は熱っぽい視線と声で担任の先生へと応えている。

あ、はにかんだ。にこ〜

「諸君！私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな？」

なんというバイオレン～ス発言
恐ろしい人だよ。この人はなんなんだ！！こいつは！！

バシン！！

「イッタっ！！何すんだゴルアァァァァ！！」

しかし、織斑先生、華麗に無視
くやし～～～～

ゴホン！！話を戻そう
だがしかし！！教室に響いたのは・・・・・・・・・・・・・・・・・

『きゃあああああああああああああああっ！！！！！』

黄色い歓声である
もう教室四方八方に響く粉砕、玉砕、大喝采
Ａ〇Ｂ４８のライブ並みの大喝采

「千冬様！千冬様よ！！」
「ずっとファンでした！！」
「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！！」

知らねーよ。南北海道でもなんでもいいけど！！

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！！」
「私、お姉様のためなら死ねます！！」

いや、死ぬなよ。若くしてその命を無駄にしてはいかんよ

そういや作者の親って「めんどくさいんなら死ね。」という暴力発言をしてくるらしいよw

きゃいきゃい、ワーワー、ガーガーと騒ぐ生徒たちを織斑先生はうっとうしそうな目で見つめる・・・・・じゃなかった、うっとうしそうな顔で見る顔で見る
そんな顔で見つめられたら・・・・・私・・・・・はっ!!また暴走してしまった・・・・

話を戻そう

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か?私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか?」

俺の見間違い出なければこのポーズでこういうことといってるわけじゃない・・・・・
素でうっとうしがってるよ・・・・・この人

先生・・・・人気はお金で買えないんですよ? もうちょっとやさしくすればいいものを・・・・・
と思ったオ〜レ〜ガ!!甘かった
テイルズオブシンフォニア〜ラタトスクの騎士〜ヒロインのマルタ・ルアルディが主人公エミル・キャスタニエに「王子様〜」なん

て？マーク付きで言うくらい甘かった
ベルギーチョコぐらい甘かった

「きゃあああああ！！お姉さま！！もっと叱って、罵って！！」

バカ野郎。本性を出すんじゃない

「でも時には優しくしてぇぇぇぇ！！」

ツンデレですか。ツンデレプレイが好みですか

「そしてつけあがらないように躾してぇぇぇ！！」

なんていうクラスに入ってしまったんだろう～～か
もう、リンクスの時よりも、濃いメンツですよ。これは

「で、挨拶もできないのか。お前は」

と、持つの弟に千冬さん（これからは織斑先生と呼びましょう）
聞きましたか！？このセリフ！！
もう辛辣「しんーらつ」［名・形動］《舌をひりひりさせるほど

からい意から》言うことや他に与える批評の、きわめて手きびしいさま。「―をきわめる」「―な風刺漫画」［派生］　しんらつさ［名］、な言動！！

「いや千冬姉、俺は――――――――――」

スパァン！！

無茶苦茶痛そうな音が教室に響く

知ってる？脳細胞って叩くと五千個死ぬらしいよ～。そして、織斑は織斑先生に三回殴られてるから計、一万五千個という脳細胞の尊い命がなくなっているんだよ～～

「織斑先生と呼べ」

「――――――――――はい、織斑先生」

はい、ＯＵＴ～

このやり取りがまずかったんですね～～～

だってこのやりとりの三秒後の教室の会話

「え・・・・・？織斑君って千冬様の弟？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『ＩＳ（インフィニットストラトス）』を使えるのもそれが関係して・・・・・いやでもそれだと不知火君はどうなるんだろう・・・・

・」

「ああっ、いいなぁっ。変わって欲しいなぁっ」

・・・・・はい、バレた～

織斑が織斑先生の弟っていうことがバレました～～～

ＯＵＴ～

うん、つまり、俺と織斑とその他もろもろはＩＳを起動させちゃったから半強制的に女子しか入れないＩＳ高校に入学しちゃった～。

つまり俺と織斑とその他二名はＩＳを使える男としてここ「ＩＳ学園」にいるんですよ～。ええ

ちなみにＩＳ学園については「ＩＳ～インフィニットストラトス～一巻」参照

っとここで終了のチャイムがなった～

「さぁＳＨＲ（ショートホームルーム）は終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

ワ～オ～、言ってることが矛盾してやがるよ～

なんていう鬼教官なんでしょう

「ああ、それと・・・・・不知火」

「はい？」

「お前は後でメンテナンスルームに来い。専用機のメンテナンスが終わったから取りに来い」

「え、グリントの整備終わったんスか・・・・・わ～かりました～」

「それと・・・・・いつまで立っている。席に付け。馬鹿者」

と言われる織斑一夏

こんな鬼のような姉を持ってしまって・・・・・うぅぅ・・・・・

涙が溢れるよ

「お前もだ、不知火」

「あ、は～い」

うん、ごめん。織斑。俺も馬鹿者だったみたいだ

メンテナンスルーム・・・・・・

「うわっ！！グリント！！どうした！！」

俺が前の世界で乗っていた機体、「ホワイト・グリント」
白い閃光と呼ばれるこの機体はＩＳとは違い、ＡＣ（アーマードコア）と呼ばれる戦闘兵器だった
し～か～し、ＩＳ学園の皆様が頑張ってくれたさいに、こんな素晴らしいＩＳへと生まれ変わっていた
あぁ、愛しのホワイトグリント。俺はこの日をどれほど待ち望んでいたことか・・・・・

「白い閃光と呼ばれる機体だったから、色は白一色だ。ベースの武器は後ろの大型ビームサーベル「アロンダイト」とレールガンと腕に装着してあるビームトンファー。これはビームサーベルとして使うこともできる。そしてホワイトグリントの最大の特徴は『ＨＩ－ｓｙｎｃｈｒｏｎｓｙｓｔｅｍ』」

「は、ハイ、シンクロン？」

「ＨＩ－ｓｙｎｃｈｒｏｎｓｙｓｔｅｍ。ホワイトグリントに特殊装備を施すシステムだ。これはまぁ、使うときに説明しよう。」

「う～ん・・・・まぁ、長い名前だからすごい能力であることは間違いないっすよね？」

「ああ。それと、切り札である単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）なんだが・・・・あまりこれを使うな」

・・・・・は？

いやいやいやいや・・・・・・

「え、いやだから。せっかくの切り札なんだから使うときは使うし。」

バシン！！

いってぇぇぇぇ・・・・・なぐられた

「お前の専用機「ホワイトグリント」の単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）「Ｆｏｒ　ａｎｓｗｅｒ」だが・・・・・その力が強大すぎる」

「えっと・・・・・つまり？」

「こいつの能力は・・・・・自分の耐久力を四分の一にするかわりに敵の機体、全ての機動力・火力・攻撃力・防御力の二倍の能力を引き出すことができる。つまり、こいつを発動したとき敵の数が二千だろうが三千だろうが、多ければ多いほど、グリントの強さは上がっていく。だが、この力は強大すぎる・・・・・この力を使いこなすほどの力をお前が得るまで、絶対に使うな」

「・・・・・」

「返事は?」

織斑先生が般若のごとく形相をするので俺は震えながら「はい」と答えた

「それと・・・・・私の弟の一夏なんだが・・・・・この学校で男子は四名しかいないし、同じ性別の同級生なんてお前しかいない・・・・・だから、仲良くしてやってくれ」

「なにいってんすか。織斑先生の頼みなら死んでも聞きますよ」

「そうか・・・・・ありがとう」

「何すか?改まって。織斑先生は俺たちの命の恩人なんだから。これぐらいはしますよ!んじゃ、そろそろ行きますわ」

「ああ、わかった」

「そんじゃしつれいしました～」

ガララ

「・・・・・仲良くしてやってくれよ・・・・・一夏と」

誰もいなくなったメンテナンスルームで千冬さんは小さくつぶやいた

その声はさっきまでの千冬さんの声ではなく、優しく、おだやかな声だった

不知火政宗の～ＩＳ説明～～（前書き）

不知火政宗
「は～い。僕の名前は不知火政宗～。分け合ってＩＳ学園に入学しちゃった高校一年生だよ～。今回は俺の愛機『ホワイトグリント』と俺について話しちゃうよ～～」

不知火政宗の～ＩＳ説明～～

名前：不知火政宗

身長：１５９ｃｍ

体重：４５ｋｇ

楽天家、陽気、神出鬼没のこの少年
何年か前、前の世界でリンクス戦争に出撃していたＡＣのパイロットである
そんな彼の異名は「リンクス戦争の英雄」。彼はその異名にふさわしき戦果を上げていた

しかし、戦争が終わり、いつもと変わらずミッションをこなしている最中、ちょっと事故にあっちゃって～、そのせいでＩＳ学園に転生しちゃった高校一年生（以下省略

趣味は昼寝と飯

特技は射撃で射的の景品全てを手に入れたことがあるほどの腕前

ＣＶ：鈴村健一

代表作：機動戦士ガンダムＳＥＥＤＤＥＳＴＩＮＹ、シン・アスカ役。ＦＦ零式、ジャック役、他様々

ＩＳ

名前：ホワイトグリント

第四世代に相当しちゃうけど、製作者はいない、てか知らない、わからない、てか触れないで

中距離型でバランスのとれたＩＳ。もうすごいよ？レールガンばんばん打っちゃうよ？

ＩＳの姿はあれだよね、ユニコーンガンダムに超似てる。マジうけるｗｗ

しかし、他のＩＳには無い「ＨＩ－ｓｙｎｃｈｒｏｎｓｙｓｔｅｍ」というシステムを装備しちゃってる

マジ凄いからね、このシステム、まぁ、後で説明するんだけども～

武装

メインウェポンはレールガン、ビームトンファー、大型粒子剣「アロンダイト」

サブウェポンは粒子ミサイル

レールガンはもう、連続でばんばん撃っちゃうスグレモノ、まじテ

ラカオス

腕に付いているビームトンファーは取り外しが可能で臨機応変に使えることができる

大型粒子剣「アロンダイト」はもうお察しください

単一仕様能力：Ｆｏｒ　ａｎｓｗｅｒ

自分の耐久力を四分の一にするかわりに敵の機体、全ての機動力・火力・攻撃力・防御力の二倍の能力を引き出すことができる。つまり、こいつを発動したとき敵の数が二千だろうが三千だろうが、多ければ多いほど、グリントの強さは上がっていくｂｙ織斑千冬

結論：これチートだね

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5087w/

IS＜インフィニット・ストラトス＞～白い閃光～

2011年12月19日21時06分発行